

# 環境デザイン学科における芸術表現のとりくみ

若生 謙二

## はじめに

環境デザイン学科では、2005年5月に全学博物館構想の実現をめざす共同研究「アーツアンドエコロジー」展、その成果をうけて同年11月に行った類人猿研究者らと連携した芸術表現「アーツアンドエイブス」展、2006年5月には日本造園学会全国大会で庭園史上の大転換を舞踊、演奏、映像で表現した舞台公演「庭園の響き」、2007年8月にはメリーランド美術大学との共同ワークショップ「竹之内街道の未来」、2009年10月にはアベノとなんばを土と緑の路でつなぐ提案を巨大模型で提案した「土に遊ぶまち」展、2010年7月にはこの作品をみた大阪府からの依頼で、東大阪市の308号線沿いを緑の回廊とする巨大模型での提案「風と緑の回廊」展、そして2011年7月には「藤井寺市を世界遺産のまちへ—緑と歴史の回廊」展などの芸術表現のとりくみを行ってきた。

私はこれらのとりくみを通じて、自身の学術観や芸術観が大きく変わってきたことを感じている。

本稿では、これらのとりくみの検討を通じて、総合芸術大学としての本学での環境と芸術表現の可能性について考察する。

## アーツアンドエコロジー展

2005年5月16日から28日にかけて、本学芸術研究所が主催する共同研究の一環として、「アーツアンドエコロジー展2005」が開催された(図1)。狩野忠正環境デザイン学科長が

音頭をとってディレクターとなり、私は狩野教授とともにこの作品展をすすめた。「アーツアンドエコロジー展2005」は、二つの目的をもって開催された。

一つは環境の世紀とよばれる21世紀を迎えて、エコロジーをアートで表現することである。今日の社会がめざす温暖化防止、脱CO<sub>2</sub>などのエコロジーの本質は、自然、工学をふくめた産業技術である。一方では、エコロジーは、エコ商品、エコハウスなど、環境保護を包括するエコロジー文化をあらわす用語としても用いられるようになっている。産業技術の推進をささえるのは人々の意識であり、人々のエコロジーへの意識に訴えかけるのは、芸術が力を発揮する領域である。文化としてのエコロジーを視覚化し、時代を切り開く力をあたえるのは芸術である。こうした視点のもとに、造形、メディア、音楽という三つの芸術系からなる14学科の芸術領域からエコロジーを表現しようというとりくみである。

もう一つは、かねてから提案されていたキャンパス博物館の構想をこの機会を利用して現実化しようというものである。三つの芸術系からなる14学科の作品でキャンパスを埋めつくすことである。これは芸術表現の分野をひろげようという意味もこめられていた。

この作品展では、学内の48の作品(図2, 3)とバックミンスター・フラー、ジョン・ケージ、ナム・ジュン・パイク、ヴォルフガング・ライプら、海外の作家らの作品も展示され、「地域、民族について」「自然、身体について」という二つのシンポジウムが開催された<sup>(1)(2)</sup>(図2)。アーツアンドエコロジー展2005は盛況の内に幕をとじた。私はこの作品展から、領域をこえた芸術表現の可能性について、そして何より、作品をつくることのたのしさを学んだ。

## アーツアンドエイプス展 サガシンポジウム

サガ (Suport for African/Asian Great Apes) という集いがある。ゴリラやチンパンジーなどの大型類人猿の保護を考える国際的集いである。京都大学霊長類研究所の松沢哲郎教授らが呼びかけ人となり多くの霊長類研究者らがつどい、毎年秋に全国でシンポジウムを行っている。松沢教授から2005年にこの集いを、天王寺動物園と大阪芸術大学を会場として大阪で行いたいという依頼があった。私は世話人としてこの集いの運営に参加することになった。

2005年は、大阪芸術大学グループ創立60周年であった。また、天王寺動物園も開設90周年を迎えていた。私は松沢教授と宮下実天王寺動物園長とともに、SAGAシンポジウム開催への協力をお願いに塚本邦彦理事長室を訪れた。塚本理事長からは快くご協力と財政的支援のお言葉をいただいた。この催しは、大阪芸術大学グループ設立60周年、天王寺動物園設立90周年の記念事業として行われることになった。

これまで、東京大学や京都大学で行われてきたサガシンポジウムでは、文字通り議論の場としてのシンポジウムが行われてきた。大阪芸術大学では、芸術の場としての歓迎ができないものか。私たちは動物園と芸大でのとりくみのうち、大阪芸術大学ではアーツアンドエイプス展を開催して、霊長類の専門家達を迎えることにした。

学内では、11月7日から15日にかけて、大型類人猿から芸術を考えるアーツアンドエイプス展への作品展が開催された。作品展では、美術、工芸、映像、音楽等、実に多くの分野の作品が出展された。また、映画監督である中島貞夫映像学科長の企画・構成により、類人猿研究者が撮影した映像を編集して大型類人猿保護のプロモーション映像が作成された。この映像は塚本学院が経営する大阪市内の5つの幼稚園の園児に見せられ、それをみた園児らがその印象をもとに類人猿の絵画を描いた。園児らの描いた200点をこえる絵画は、芸術大学の教員、学生らの作品とともにアーツアンドエイプス展に出展された。また、この作品展には京都大学

霊長類研究所のチンパンジー、アイヤ、アメリカのヤーキース研究所のチンパンジー、ワショー、そして多摩動物公園のオランウータン、モリーが描いた絵画など、大型類人猿が描いた多くの絵画も展示された(図3)。

類人猿の描いた絵画の横には、日本画家である村松秀太郎美術学科長や漫画家のバロン吉元教授らの作品が展示された。とりわけ、村松教授の作品は、チンパンジー、アイの作品と色彩構成が酷似して、注目をあつめた。

造形分野の作品展とともに研究者らがあつまる当日には、いくつもの企画が行われた。川井郁子教授によるヴァイオリン独奏につづき、美術史家の石井元章教授には、「西洋美術にみる猿—象徴から実体へ」と題する講演をいただいた<sup>(3)</sup>。その後、このシンポジウムのメインイベントとなった舞台公演シンポジウムが開催された。

これまでのサガシンポジウムとは異なり、芸術大学で開催されるこの催しに対して、私たちは霊長類研究者らがアフリカや東南アジアの現地で撮影した映像を編集し、それを映しながら、研究者らの講演を行おうというものである。私は中島貞夫映像学科長に映像の編集をお願いした。講演では、ゴリラ(平田聡氏)、チンパンジー(山越言氏)、オランウータン(竹ノ下祐二氏)、ボノボ(伊谷原一氏)についての講演が行われ、それぞれの講演の背景としてそれぞれの現地での映像が流された。また、講演者が交代する間の時間には、アフリカの民族衣装をまとった演奏学科の学生が現地にふさわしい音楽を演奏した。これは学術と芸術が融合した試みであった(図4)。

そして、この公演につづいて国連平和大使であるジェーン・グドール博士の講演が行われた。その後、アーツアンドエイプス展2005作品展の理事長表彰が行われた。

サガシンポジウム8とアーツアンドエイプス展2005は、成功のうちに幕を閉じた<sup>(4)</sup>。

## 天王寺動物園の壁画

天王寺動物園における銅板塀への描画のとりくみは、すでに本誌にも報告した<sup>(5)</sup>ので、概略だけを述べることにする。筆者がとりくむ天王寺動物園の再生計画において、工事の際には銅板塀が配置される。これに対して、動物の生息環境が展示される新たな展示がつけられるという夢のある事業であるにもかかわらず、工事の間、灰色の塀で囲まれるのはあまりにも味気ないということから、私は宮下実天王寺動物園長と相談して、学生に展示される動物の生息地の様子を描いてもらおうというとりくみを進めてきた。

最初は2003年のアジアの森での25mの描画、次は2006年のアフリカサバンナの40mの大作、そして2008年にはふたたび、アフリカサバンナの25mの絵を描くことになった(図5)。40mの壁画の一部は、現在も谷町筋に面した堀越公園の周囲に配置されている(図6)。これらの絵は仮設の仮囲いに描かれたものであったが、2009年には園内のサイ舎の奥にある阪神高速道路が、生息環境の展示の背景としてそぐわなものであったために、その壁面に65mのサバンナの空の絵が描かれることになり、学生はその下絵として6.5mの絵を描いた。

これは高速道路という都市インフラの壁面を地域の環境に調和させるという、環境デザインの現実的で新たなとりくみである。この手法は今後も他の地域での応用が可能な芸術的手法である(図7)。高速道路の壁画は、阪神高速道路公園の2010年のカレンダーにも掲載された。

## 庭園の響き

私はアーツアンドエコロジー展2005とそれについて開催したアーツアンドエイプス展での体験を通じて、本学での芸術表現について、他大学では真似のできない独創的な、そしてさまざまな表現ができることに気づくようになった。

翌2006年の5月に緑の専門家がつどう日本造園学会が本

学で開催されることになった。造園学は環境デザイン学科の軸となる学術である。学会の全国大会では、通常それぞれの年次にふさわしいテーマのシンポジウムが開催される。芸術大学として造園の芸術性を考えるとりくみができないものか。私たちはアーツアンドエイプス展で中島監督が行われたとりくみに大きな刺激をうけて、舞台公演を企画した。

18世紀のヨーロッパでは、庭園の歴史をぬりかえる大きな変化がうまれていた。それまでの直線的で幾何学的な整形形式の庭園から、後にニューヨークのセントラルパークをはじめとする公園の風景のモデルともなる、風景式庭園の誕生である。今日の造園にも大きな影響をおよぼす、整形形式から風景式への庭園の変化は、なぜこの時期に生みだされたのか。私は造園史上の謎を解く、このテーマの一つについて、この大会で学術論文を発表した<sup>(6)</sup>。論文は謎や課題を詳細に検証してゆく。しかし、このテーマでとりあげるような大きな歴史的变化についての謎解きは、検証というよりは仮説としてのひとつの史観を提示するものである。

私は史観の提示として、論文ではなく、舞台公演という芸術表現が可能であることに気づいた。

庭園は、その国の繁栄をあらゆる政治や経済の力だけではなく、建築、絵画、詩歌、そして舞踊や音楽などの芸術と深く結びつきながら歴史を形づくってきた。18世紀はルネサンスからバロックにいたる整形形式庭園が風景式庭園に変わってゆく時代であり、また音楽の世界では、リュリやヘンデルら大音楽家が活躍したバロックと袂をわかち、モーツァルトが翼を広げた新古典主義へと転換してゆく歩みでもあった。水の力で音を奏でるオルガンの噴水が、庭園に音楽の響きをそえていたイタリアルネサンスのエステ荘庭園、ルイ14世が整形形式庭園として作りあげたフランスのヴェルサイユ庭園、そして整形形式庭園として造成されながら、風景式へと姿を変え、風景式庭園が隆盛する礎となったイギリスのストウ庭園。これらの三つの庭園を舞台に、これらの庭園がうみだされた時代と、音楽、舞踊、絵画などの芸術との深い関わりから、舞台公演という表現でその謎を探ろうという試みである。

この年は、時あたかもモーツァルトの生誕250周年記念であった。モーツァルトと同時代を生きたマリー・アントワネットに焦点をあわせて、庭園の映像、演奏学科の教員と学生による演奏、舞台芸術学科の教員と学生による舞踊、そして舞台芸術学科長で俳優の浜畑賢吉教授による語りで、舞台公演を行った<sup>(7)</sup>(図8-10)。

5月23日に大学の芸術劇場で行われたこの公演は、大成功で、一般にも公開してほしいという要望に応じて、その年の12月1日に大阪市中之島中央公会堂大ホールで公演が行われた。

## 土に遊ぶまち

芸術計画学科では、谷悟准教授を中心としてなんばパークスを会場として「なんばパークスアートプログラム」というとりくみを行っており、2009年は環境デザイン学科のとりくみを表現することになった。私たちは、このとりくみとして「土に遊ぶまち」というテーマでの芸術表現にとりくむことにした。天王寺周辺には駅前開発がすすみ、アベノには300mにおよぶ超高層の近鉄の駅前ビルが完成する。天王寺動物園も生態的展示をとりいれて大きく変わりつつある。アベノ周辺は大きく変貌し、すぐ近くのなんばからは、超高層ビルがそびえたつ姿が手に取るように見えるに違いない。近い将来、なんばとアベノは今以上に関係が深まるであろう。私はこのとき、天王寺公園のあり方検討委員会(大阪市)の委員長を仰せつかっていた。ために新世界からなんばパークスに歩いてみると、その時間は15分程度であった。これはちょうど良い散歩道である。この間を歩く道としてつなげないものか。

私たち環境デザイン学科の教員らは3年生の実習として、アベノとなんばを緑と土のみちでつなぐ計画を課題とし、この成果を1/200の巨大模型で表現し、展示することにした。建築の分野では、白いスチール模型で表現することが一般的であるが、私たちのとりくみは、景観の表現である。その

ためには景観が理解できるような表現が必要である。私たちは、学生と検討し、航空写真を1/200で表現し、その上に提案するエリアの模型を作成することにした。模型は景観を表現することが重要である。7×10mにおよぶ巨大模型は完成し、ナンバパークス6階に見事に展示され、一般に公開されることになった。

会場には3,000人をこえる人々が訪れ、この巨大模型での提案は盛況であった。訪れた観客の多くは、この提案を実現してほしい、橋下知事にそのことを伝えてほしいといった。私は大阪府の大槻公園課長にそのことを伝え、大槻課長は橋下知事にメールで上申された。知事からは、即日の返信で、会期中には見学に行けないが、府の施策と一致するので、このような考え方をとりいれたいという返信があった。会場には大阪府の小河副知事や大阪市の北山副市長も見学にくられた。3年生の学生達が巨大模型で表現した新たなとりくみは、10月3日の毎日新聞<sup>(8)</sup>、10月4日の朝日新聞<sup>(9)</sup>、読売新聞<sup>(10)</sup>、大阪日日新聞<sup>(11)</sup>に掲載された。このとりくみは大成功であった(図11)。

## 「風と緑の回廊」展

12月に入った頃、大阪府公園課の大槻課長が大学にくられた。大阪府では、ヒートアイランド化する都市に対して、大阪湾から生駒山系に風を通す東西の「風の道」を実現するという構想をもっている。ついては、大阪に東西の風をよび、風と緑の道とするエコ都市、大阪の都市デザインをなんばパークスで学生が行ったような巨大模型による表現で提案していただけないか、というものであった。

環境デザイン学科では、この依頼をうけて、昨年と同様に3年生の実習でこの課題にとりくむことにした。しかし、この時点で具体的に示されていたのは、大阪の東西をむすぶ矢印だけであった。アスファルトに覆われ、ヒートアイランド化する大阪のまちを土と緑と水でよみがえらせるにはどうすればよいか。大阪府は東西にはる国道308号線(阪神高速

道路東大阪線下)の緑化をすすめているというので、私たち環境デザイン学科の教員は大阪府公園課と知事直轄のプロジェクトチームの職員らとともに、4月初旬に東大阪市を通る国道308号線周辺を歩き、この沿道周辺をとりあげることにした。

学生に与えた課題は、沿道一帯を風と緑がつくるエコ都市をすすめる区域とし、三面がコンクリートの護岸となっている第二寝屋川を自然護岸として、風の通り道とする。また、中央環状線とのジャンクションとビルの屋上緑化をすすめる。これらについて、30年後をみすえて実現が可能な提案を行う、というものであった。提案は、7×15mの巨大な現状の航空写真の上に、1/200の大きさの模型で表現した。

風を通すには、ビルのまちに建物のないオープンな場が必要である。航空写真でみれば、沿道には多くの駐車場があることがわかる。国道308号線に隣接するビルの駐車場を道路側にあつめれば、国道308号線をふくめて片側40m、両側で80mにおよぶ風の道なる広いスペースをとることができる。沿道の歩道とともに、駐車場を高木と芝で緑化すれば、広大な緑陰の道となり、このエリアの温度を下げ、ビルの屋上緑化とつらねることで、風をさそうことができる。

ビルのまちではの風と緑の道には、川もおおきな役割をはたす。コンクリート護岸の第二寝屋川を世界の趨勢にならい、自然護岸として水辺にちかづける緑の堤防にすれば、緑の河川は風の道となる。風と緑の道は、まちの温度を下げるだけでなく、美しいまちをつくりだし、鳥や昆虫があつまり、生駒山系につづく生物多様性を生みだす場となる。

会場はNHKのご好意でNHKホールのアトリウムを使わせていただき、会場には前年、提案したアベノとなんばを木陰の道でつなぐという巨大模型も同時に展示した。このプレゼンテーションの特徴は、巨大で自身の家屋が特定できる精密な模型の上を歩くことができるというところにある。航空写真でつぶさにまちの現状をながめ、その目で提案している姿を巨大な模型でながめるとい、わかりやすさである。その意味では世界ではじめてのとりくみである(図12,13)。

7月10日のオープニングでは、演奏学科によるコーラス・ア

ンサンブルで幕をあげ、塚本邦彦学長からは、「組織も生活の場もストームではなく、ブリース(そよ風)が流れていることが大切である」というお言葉をいただいた。23日の最終日には、大阪府の橋下徹知事がお見えになり、学生は巨大模型を前に知事にプレゼンを行った。会場一面にひろがった緑の都市となったジオラマを前に橋下知事は、「本当に大阪は緑が少ない。これぐらいやらないとだめだ。この提案に少しでも近づけるように、大阪府も力をいれます」と宣言していただいた(図14)。

この会場では、同時に暑い夏に道路に打ち水をして、温度をさげるイベントも行われていた。イベントの最後の記者会見で、知事は、「すぐに温度が下がる打ち水よりも、本質的な対策である緑陰樹の増大に力を注ぎます」と語られた。環境デザインという芸術作品は、知事の心という現実の施策に影響する力を発揮したのである。

このプレゼンの模様は、NHKをはじめ、夕方の各テレビで放映された。また展示の様子は、7月11日の朝日新聞<sup>(12)</sup>、産経新聞<sup>(13)</sup>、大阪日日新聞<sup>(14)</sup>、読売新聞<sup>(15)</sup>、朝日小学生新聞<sup>(16)</sup>の各紙で紹介され、JOBBS インターネットラジオなどでもととりあげられた。この巨大模型はその後、9月に東大阪市役所のホールで、また翌年3月に東大阪市の大阪府立図書館ロビーでも公開された。

## 「緑と歴史の回廊」展

大学近くの藤井寺市周辺に広がる古市古墳群が世界遺産暫定一覧表に名をつらねたことをうけて、私たちはこれが世界遺産に認定されるような、まちの姿を提案することを課題として、3年生の実習を行うことにした。古市古墳群周辺を景観法の景観地区に指定するという設定で、そのエリアの景観計画を提案し、藤井寺市を古墳群にふさわしいまちなみにしようというものである。

具体的で実現が可能な学生たちの提案「藤井寺市を世界遺産のまちへ 緑と歴史の回廊」展は、1/200の5×10mの巨

大模型で、7月5日から18日にわたって、NHKホールで展示され、このプレゼンの様子は、毎日<sup>(17)</sup>、産経<sup>(18)</sup>、大阪日日の各紙で紹介された。

## おわりに

私たちはこの6年間の間に、実に多くの新しいとりくみを行ってきた。これらはみな既存のジャンルにはおさまりきらない作品である。これらのとりくみをよく見直してみると、環境デザイン学科が教育内容としてかかげる枠組みをこえていることがわかる。環境デザイン学科は環境計画学科として開設された。それはある一定のエリアを環境に配慮してデザインしてゆくことをめざした芸術領域であり、場をつくる建設のための芸術である。

本稿で紹介したとりくみは、建設という深化した領域から少しひいて、より広いアングルで環境に焦点をあてたものである。その意味では計画やデザインよりも風上にある環境の意識やその表現に光をあてた環境芸術ともいえるとりくみである。これらの特徴は、建設系のような既存の分野とは異なる領域であり、独自のジャンルを保ちながら、関心を持つ人の母数をはるかに広いことである。

時代は環境の世紀である。省エネルギーやクールビズ、野生動物保護や生物多様性の確保など、地球的規模で環境へのとりくみが行われている時代である。環境を創出する具体的な知識をもちながら、より多くの人類の関心に応えてゆく環境芸術は、具体的な環境をつくる上での大きな力となるにちがいない。

環境芸術は、多様性とゆるやかなつながりの原理をもつ。それはあらゆる状況をよみとり、自由にさまざまな領域と手を取りあう広がり原理でもある。

これらは多くのメディア領域、あるいは音楽の領域をもつ大阪芸術大学でこそ、その具体的な教育と研究が可能な領域である。本稿で述べた、この6年間に環境デザイン学科が他学科と手を携えてとりくんできた先駆的な試みは、本学が

この領域を世界に先がけて本格的に成長させる礎となりうることを示している。

環境の世紀を芸術から切り開く、環境芸術という世界で初めて独自のとりくみを本学から発展させることは本学の理念と合致するものといえよう。

## 文献及び註

- (1) アーツアンドエコロジー展、2005、大阪芸術大学
- (2) Arts & Ecology 2005、2011、アーツとエコロジーの新しい関係報告集
- (3) この講演の内容は、動物観研究 No.11、2006年に「西洋美術にみる猿」と題した論文として収録された。
- (4) 福原成雄教授は塚本英邦講師らとともに、この年の12月に大阪市の中之島公園でアーツアンドローズという作品展を開催することに力をつくした。
- (5) 若生謙二、2008、天王寺動物園サバンナ肉食動物エリアとアニマルアーツ、大阪芸術大学紀要芸術
- (6) 若生謙二、2006、「ハハーの起源とその変容過程」、Vol.69、No.5、
- (7) 若生謙二、2006、平成18年度日本造園学会全国大会記念舞台公演「庭園の響き」、ランドスケープ研究 Vol.70、No.2、pp.1-8
- (8) 朝日新聞、「通天閣も見下ろして なんばにジオラマ」2009年10月4日朝刊、大阪版
- (9) 毎日新聞、「未来のミナミを巨大模型で表現」、2009年10月4日、大阪版
- (10) 読売新聞夕刊、2009年10月3日、大阪版
- (11) 大阪日日新聞、「ミナミの「明日」一目で 大芸大など「土に遊ぶまち」展」、
- (12) 朝日新聞、「未来の大阪、エコの街、大阪芸大生が模型展示」、2010年7月11日、大阪版
- (13) 産経新聞、「風の道で大阪冷やせ」2010年7月14日、大阪版
- (14) 大阪日日新聞、「「緑の道」で街に涼風、大阪芸大が構想模型」2010年7月16日、地域総合版15) 読売新聞「土と緑の大阪 200分の1模型、大阪芸大生」2010年7月18日、大阪版
- (15) 読売新聞「土と緑の大阪 200分の1模型、大阪芸大生」2010年7月18日、大阪版
- (16) 朝日小学生新聞、2010年7月19日
- (17) 毎日新聞、2011年7月4日、世界遺産に適した景観「古市古墳群」模型でアピール、大阪版
- (18) 産経新聞、2011年7月6日、古墳群と調和した街に世界遺産目指し、大阪芸大生が模型で提案、大阪版

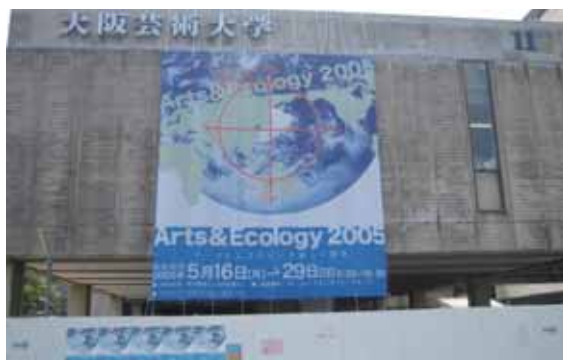


図1 アーツアンドエコロジー2005。この際に登場した巨大パネルは、その後、芸大のイベントによく用いられるようになった。



図4 SAGA シンポジウム アーツアンドエイブス展での舞台公演



図2 アーツアンドエコロジー2005に出展した「かくれた次元」



図5 天王寺動物園の工事の際に描かれた壁画



図3 アーツアンドエイブス展に出品された大型類人猿の描いた絵画



図6 谷町筋沿いに設置された天王寺動物園での鋼板塀の描画作品



図7 阪神高速道路に描かれたサバンナの空の壁画(左描画前)



図8 「庭園の響き」のポスター



図9-10 日本造園学会全国大会で上演された 舞台公演  
「庭園の響き」



図12上、13下 大阪府の依頼で提案した「風と緑の回廊」展



図14 橋下知事の前でプレゼンする学生「風と緑の回廊」展



図11 なんばパークスで開催された巨大模型でのメディア  
プレゼンテーション「土に遊ぶまち」



図15 藤井寺市を世界遺産のまちへ「緑と歴史の回廊」展